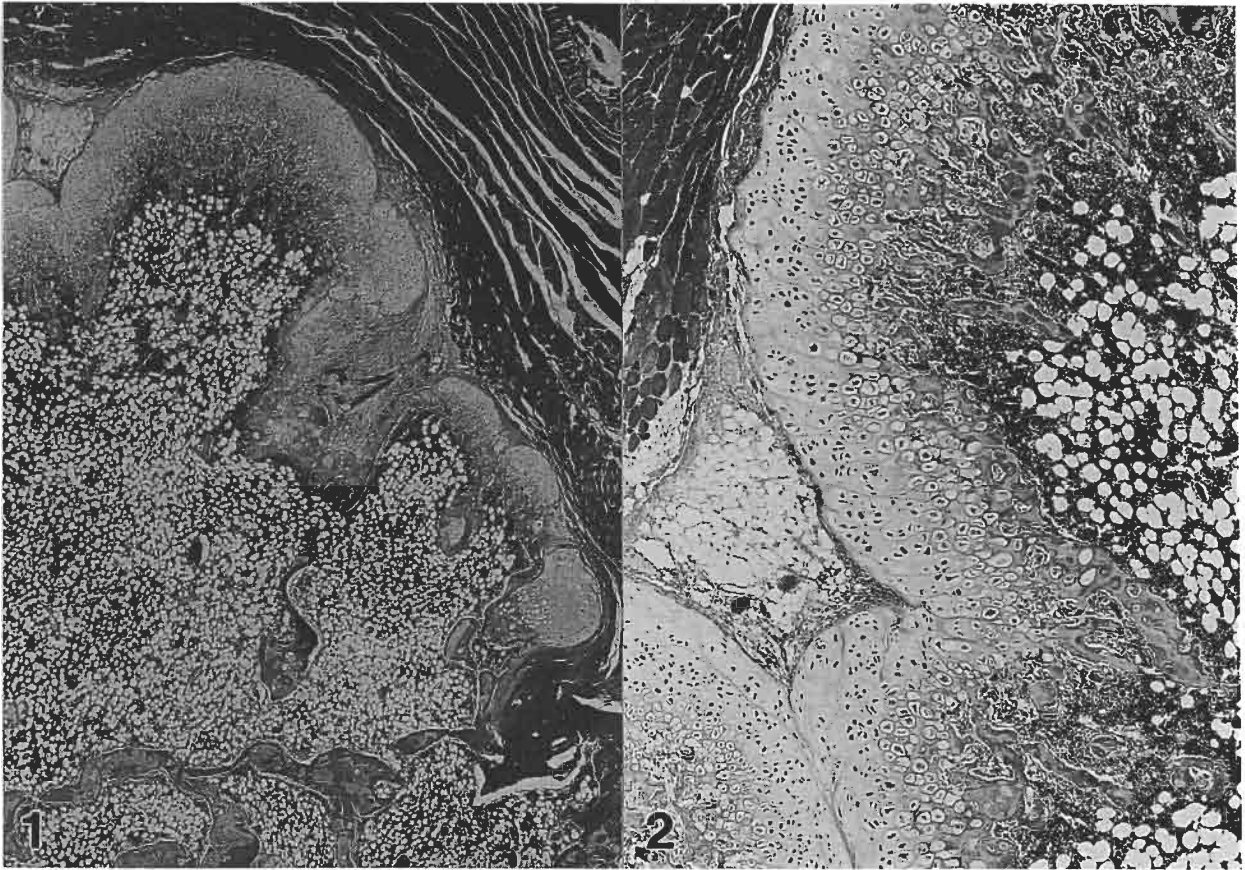


# ラットの骨軟骨腫症

(財)食品農医薬品安全性評価センター病理部出題 第34回獣医病理学研修会標本No.627



動物：SD系ラット，雄，58週齢。

臨床的事項：本例は12ヶ月間反復経口投与毒性試験の無処置対照群の動物として飼育されていたラットで、投与終了時に計画屠殺された。臨床観察において8週間前より、前肢右上腕骨から右肩甲骨にかけて腫瘍が認められていた。血液学検査では、WBCが $16,000/\text{mm}^3$ とやや高値、TGが $42.5\text{mg}/\text{dl}$ とやや低値を示した以外特記すべき所見は認められなかった。軟X線像では、前肢腫瘍は上腕骨骨幹部に一つと上腕骨骨端から肩甲骨に及ぶ位置に一つの計2個の腫瘍より形成されていた。腫瘍は海綿状構造を呈し、上腕骨骨端側では正常骨との境界は不明で肩関節も確認できなかった。肋骨にも同様な海綿状構造を呈する腫瘍が観察された。

肉眼所見：右上腕骨から右肩甲骨にかけてクルミ大の腫瘍が、また右最後位の肋骨に大豆大の腫瘍が観察された。いずれもやや堅く切開困難、断面は海綿状骨髄様で表面は灰白色の薄い層で被われていた。他臓器には著変はなかった。

組織所見：観察された前肢及び肋骨の腫瘍は同じ組織像であった。腫瘍は表面にやや凹凸のある同心円状の構造を呈し、外層は硝子軟骨、中心部は海綿骨及び脂肪を多量に含む骨髄より形成されていた(写真1)。腫瘍表面は骨膜で被われ親骨の骨膜と連続し、一部親骨の骨皮質や骨髄も本腫瘍と連絡していた。硝子軟骨層では軟骨細胞が小柱状あるいは不規則分葉状に配列し、アルシアン青に染まる軟骨基質が認められた。細胞は同齢の軟骨細胞に比べ大きいものの、異型細胞や多核細胞はなく典型的な軟骨内骨化を示した(写真2)。

以上の所見から骨軟骨腫と考えられた。さらに、多発性であることから本症例は“ラットの骨軟骨腫症”と診断した。人、馬、犬では遺伝性骨軟骨腫症、猫ではFeLVに対し陽性を示す骨軟骨腫症が知られているが、自然発生性のラットの骨軟骨腫症は珍しいものと思われた。

同意語：多発性骨軟骨腫。